

オフィスから歩いて通えなくもない自宅の貸家は、純和風の3LDKである。その一角、こうして頭を突つ込む押入れは、今や突つ張り棒がたまされたクローゼットと化していた。

洗濯がまるで間に合っていない。買い足し続けたせいで売り場のごとく白のワイシャツが並んでいる。しかしながら身につけるのはせいぜい手前の数枚だけで、何がどうなっているのか奥にはまるで覚えがない。だからして確か、とレフ・アーベンは記憶を辿った。袖を通したのは病院からホテルまでの一回きりで、持ち帰ってすぐクリーニングへ出すとここへ吊るしたはずだと思い起こす。

ならそれは日々のローテーションに追いやられた奥の奥から見つけ出されていた。淡いながらもピンクのオックスフォードシャツは、暗い中でひととき異質とその目に映る。あつた、と急ぎ掴み出していた。

気に入っている。

言わずとも袖を通せば伝わるだろう。ただ厄介なのはその色目だ。眉をひそめて今一度、眺め直し意を決する。

そもそも嵐の中では前さえ見えず、シエルターなんて気の利いたものこそありはしない。ゆえに通り過ぎるまで、互いは互いに掴まりその場をしのぐほかなかった。たとえばそれは離さない、と約束させるための意地悪い嵐だったとして、時に人生にはそんな嵐が吹きつけることがあるらしい。

試されていると思う時こそ、意地を張ってはだめ。自分に素直になりなさい。
在りし日のバブシカが繰り返していた、それも言葉のひとつだ。

「これで講座は終了です。ご購入の御案内はこちらに。ここはあと三十分ほど自由にできます。楽器を触りたい方はその間に思う存分どうぞ。質問のある方は私へ遠慮なく。でない方はお疲れ様でした。素敵な音楽と、よい週末を」

結局、参加したカルチャーセンターのテルミン無料体験講座は演奏を体験するよりも、テルミンの小型版、マトリョーミンという新しい楽器の、これはマトリョーシカの中にパーツを納めた持ち運び可能な組み立て式テルミンだ、セールスを目的としたものらしかった。

テーブルと椅子が一体になっているせいで、体勢は座ったきりと融通が利かない。物足りない講座に加えて狭苦しく、無料なのだからこんなところか、諦めレフ・アーベンは遠慮気味に息を吐いた。

銃弾を食らったあの日から早くも十日あまりが経とうとしている。折れた骨に違和感は拭えなかったが、どうやら死神には愛想をつかされたようで、晴れて退院した今、こうしてラスベガス、その居住区にあるカルチャーセンターを訪れていた。

つまり日頃をよく知る人物ならその時間をどう捻出したのか、と首をひねることだろう。確かに誰もが事実確認に昼夜なく奔走している最中でもある。しかしながらチーフ百合草に与え

られた指示といえば、判をついたような日中八時間のデスクワークのみだった。これをよきにとれば体調を考慮して、だろうが実際はフライングとなった確保時に対する謹慎で間違いない。おかげで時間は潰しきれないほども余って、慣れない行動に期待外れを食らってみる。

果たしてマトリョーミンたるものは、売れるのか。

講座の最初に配られた冊子は数ページと薄い。向けて手を伸ばし、文字を辿るべく視線を落としかけたところで感じる何かに動きを止めた。

廊下側、並ぶガラス窓の向こう側だ。そこにバーバラ・ウィンストンの姿はある。やつと気づいたといわんばかり手を振るバーバラはロビーを指して頭を傾け、握ったり開いたり、顔の横で手を振ったかと思えばきびすを返した。

早いな、と思う。見送り正面へ向きなおれば、そこで受講生に囲まれたマトリョーミンは早くも取り合いと大人気だ。だがため息を吐き出したところなら加わるだけの興味はわいてこず、何より用件はバーバラを待たせておくに気の引ける内容でもあった。

ちようどだ。いい加減愛想の尽きた椅子から尻を持ち上げることにする。荷物はそれしかない。足元に置いていた紙袋を掴み上げた。胸のコルセットのせいかな動作はいちいちおっくうでならず、申し訳なくも冊子はそこに残してゆくことにする。挨拶する相手などいない。教室を後にした。

センター内、講座は他にも開かれると、終えて吐き出されてくる生徒が今や廊下に賑やかと

声を響かせている。

午後九時。

紛れて歩けば受け付け前だ。置かれたソファに腰かけ待つバーバラの姿を見つけていた。

白衣と違い、やはり色つきの服が見慣れない。何が入っているのか、たすき掛けにしたままでヒザへ乗せたカバンはやけに大きく、その横顔はニコリともせず前の自動販売機を見つめていた。つまり余計なことを言ったのか。考えたところで今さらどうすることもできやしない。わずかに重くなった気分を入れ替える。

と何の脈絡もなくバーバラが振り返った。様子は先ほどの自分を連想させるようであらず、病院で幾度も目にした笑みはようやくそこへと浮かぶ。立ち上がれば歩み寄ってくる足取りこそ早く、行き交う人を避けて互いはロビーの隅で向かい合った。

「ほんと、ここを聞いておいて大正解。急患もなし。時間とおりに仕事は終了よ。きっと病人をよこすな、ってナイチンゲールのおぼしめしね」

開口一番、まくし立てるバーバラのあけすけな口調は、病室と何ら変わらない。だからして知ったのは、ときに患者の間で話題になる人気者だということだった。その人気者との約束は本来、講座が終わったその後、自分が病院へ立ち寄るといふもので、おかげで言葉もこう出る。「病人は夜、出歩かない。もう病人じゃなくなった。だいたいこれはいいでいいような用事だ。わざわざ来るほどのことじゃない」

「あら、あなたはまだ病人です。言っただしょ。本当はじつとしていた方が治りは早いって。けど無理な性分みたいだから。そうね、今ここでわたしとかけっこしてみる？ 自分の言っていることがイヤってほどわかるはずだよ」

いさめるバーバラに淀みはなかった。さあ、どうするのか。挑発的な視線さえ投げてすぐにも冗談よ、と笑ってみせる。

「わたしが呼んだから途中で抜け出してきたんじゃない？ 向こう、よかったのかしら？」
後にして来た教室の方をのぞき込むと確かめた。

「ちょうど終わったところだ。かまわない」

おかげで本題へはすぐにも取かかれそうで、握り続けていた紙袋を互いの間へ持ち上げてやる。

「これだ。中に言っていたやつが入っている」

とたん縮みあがったバーバラは、その目を大げさなほど見開いていった。

「ありがとう。嬉しいっ！」

受け取った紙袋をたちどころに開く。何、遠慮することなく中へ手を差し入れ、やおらその動きを止めてもみせた。

「でもお見舞いの品だつて。本当にもらっていないのかしら？」

つまり中に入っているのは「小熊のチェブ」のDVDだ。ストラヴィンスキーが退屈しのぎ

にと、置いていったものだった。

それは退院した翌日である。

退院時、二十四時間心電図というものを貼られ、ポータブル音楽プレイヤーのような機器を首から下げていたなら、そこに納められたデータごと機材を返しに翌日、ふたたび病院を訪れていた。そのさい装置の回収を担当したのはバーバラで、そこで「小熊のチェブ」をもう一度、見ようとレンタル店へ向かったことを、だがもうDVDはラインナップから削除されており再入荷の予定しないことを聞かされていた。

良さが分かっている。二枚あってもいいくらいなのに。思わない？ そうね、レンタルしようとした自分がケチだったわ。気に入っているんなら保存版と視聴用よ。二枚、買う。明日にでも探しに行くわ。

話すさまは相場で、おかげで一枚、手元で余っていることを気づかされていた。譲る。

ついぞ言っていた。

「どうせ家に同じものがある。二枚あっても見る方は一人だ。持っていては仕方がない」

「そうね。だったら遠慮なくいただくことにする。同僚さんによろしく伝えておいて。擦り切れるほど見るだろうけど、大事にするからって」

なるほどまいこと言うなと聞けば、バーバラの手は紙袋からDVDを取り出していった。

「そうそう、これよ、これ」

パッケージの裏表を眺める顔は、ご満悦そのものだ。おそらく伝言が届くことはないだろうが、その顔へかたちだけでもわかった、とうなずき返すことにする。

ひととおり眺め終えてバーバラは、やがてDVDをカバンの底へ仕舞いこんでいった。見とどけたなら用はすんだ、と思う。

じゃあ。

踵を返しかけたところで、押し止まった。

何しろ素振りはまるきり面倒ごとが片付いた、と言わんばかりでいただけでない。こういう場合は、と急ぎ踏み止まり、そつない話の一つや二つ投げてワンクッションおくものだろうと装いかける。だがそれこそ慣れた芸当でなく、察したようにそうね、と口を開いて間をつないだのはバーバラの方だった。

「もらう物だけもらってさようなら、じゃあんまり。あたしはこの後、一人で夕食をかきこむだけなの。あなたは？」

肩をすくめてみせる。

単身ここへ来ていることは入院時に知られた話だ。だが近くに美味しいチャイニーズがあるの、と言うバーバラへは果たして好みの話をしたろうかとうがる。判然とせず、しかしながら境遇は似たようなもので、今、不測の事態に振り回される立場でこそなかった。

カルチャーセンターのロビーはいつしか、残っている方がワケありな様子だ。回した手で何気に財布があることを確かめる。同じだ、と答えて返せばバーバラはこっちよ、と誘ってこともなさげにまた別の話題を投げていた。

言うとおりで。店は遠くない。ただし氣遣うバーバラはゆったり歩くと、「タイハン」と看板をあげた店へ十五分もかけて辿り着いていた。

漂う中華油の匂いが香ばしい。詰める客に並んだ家具がアジアも裏通りを連想させて止まなかった。取り囲んで渦巻く装飾もまた良くも悪くも怪しげだったが、もろともせずバーバラはその中を奥へ奥へと進んでゆく。空いているテーブルを見つけてすぐさま上げた手で呼び寄せた。

落ち着かないけど、シェフは最近こっちへ来た中国人だから間違いないの。話す口調は自慢げにさえ聞こえて仕方ない。

やがて運ばれてきた料理は実際、その通りとどれもが美味かった。店が店なら気取る必要こそありはしない。久方ぶりの味に手は止まらず、その七割を自分が、残り三割をバーバラが腹へおさめる。埋め合わせて五分にするように、あいだ七割をバーバラが、残り三割を自分が話した。

そんなバーバラの態度は病室と変わらない。どれほど親しげな素振りをみせたところで距離

は初対面の時を保つと、馴れ馴れしくこそしてこなかった。現に七割を埋めた話題も好きな映画に、病院での面白おかしな出来事と、話す相手を選ばぬような内容ばかりだ。違う話題があったとすれば一度だけ、撃たれて運ばれてきた職務についてを問いかけたことくらいだろう。だがそれこそ語れる類でないならはぐらかし、はぐらかされたバーバラも深追いつてくることはなかった。それでいて変えない態度に安堵する。おかげ仕事を忘れることは出来ていた。時間に気づかされたのは、見える顔ぶれも様変わりして減った客のせいだ。見回し覚えた気だるさはいえ、満腹と慣れない長話に疲れたからだろう。

龍が巻き付く時計はもう十一時過ぎを指している。閉店が近いらしい。店員の動きも客や厨房から離れがちとなっていた。様子に顔を見合わせたのはどちらから、というわけでもない。合図に互いは席を立つ。

そうして最後、聞かされたのは、あろうことかバーバラの悲鳴だった。

「ロツカーよ。私ってバカ。中の棚に置いたところまでは覚えてるの。後で入れようと思っていたのに、忘れてきてる」

支払いを済ませようと立ったレジ前で、バーバラはカバンをまさぐり万策尽きたようにうなだれていた。

「かまわない。俺が払っておく。最初からそのつもりだ。なくしたんじゃないと分かっているなら、たいしたことじゃないだろう」

すぐにも財布のことだと分かっただけに驚かせる。そう思ったことは否めない。

「でも案内するって言ったのはわたしよ。チェブも、もらったところなのに」

「それは同僚からのおごりだ。気にするな」

同様に驚かされたせいだ。向かいで店員も浮かべた笑みをぎこちなくさせていた。手へ、自分のカードを握らせる。

「こういう時はせめて割り勘だわ。ああ、もう、何してるんだらう。顔から火が出そう。いえ、出た。もう出てる！」

以後も続く罵倒はよくそれだけ出てくるな、と思うほどで、聞かされつつすませたサインは書き損じそうで危なかった。もう済んだ、忘れろ。言ってバーバラを店の外へと押し出す。

そこに街並みは間違いなく、ベガスのそれと広がっていた。だが居住区だ。華美で過剰なネオンはなく、人の気配すら途切れがちと息をひそめている。通りへ出ればタクシーがつかまるはずだ。バーバラを促していた。

「けど乗るほどの距離じゃないの」

言われて送る、と返す。だがどっちだ、と聞いたところで初めて会話に間はあいていた。

「……それは、ちよつと困る」

笑いに紛らせ明かすバーバラのわけは、こうだ。

「お巡りさんだから信用していいと思うのだけれど。信用するから明かせば私、一人暮らしな

の。だからどこに住んでいるのかを知られるのは……、ちよつと落ち着かないわ」

ああ、と思えば、動きも止まっていた。なぜならその男につく形容詞はおそらく「知らない」が妥当で、確かに尻に腹も見られて飯も一緒に食べたが、それもこれもたまたま担ぎ込まれただけの、同じ映画に興味を持っただけのことだった。物騒な案件も絡んでいない自分にある信用といえばその辺りが限界で、むしろ印象の大半は人に撃たれて運ばれてくるような、人と言えない仕事を持つ怪しげな男となる。

社交辞令との区別がつかないわけじゃない。

いや、だから当たり障りのない会話は続いていたのか。

じゃあここで。

言わんばかりにバーバラが隣りから身をひるがえしていた。

「ミスターアーベン、心電図の検査結果は明日の午後二時。一階、外来第五診察室のドクター、マクダナルよ。十分前には待合まで来ていて」

後じさり、そこから呼びつける名でここを病室へ変えてみせる。ならここを別れる場所と決めるしかなく、止めた足で大丈夫だ、とうなずき返した。

とふいに、そうねとバーバラは空を仰ぐ。

「ナースの所見だけど心配しなくていい。仕事を抜けて出してくるなら散歩だと思って臨めばいいから。滅茶苦茶サボって帰るといいわ」

「ご丁寧にもサボタージュをすすめてくれていた。

「もう、撃たれて運ばれてきたりなんかしちや、だめよ」

提案へは肩すくめて返すほかないだろう。

「そういう職場は人にも言えない。よくないわ」

言われていた。

「サボるついでに、そうね」

その目をしばし宙へ泳がせ、やがて再びこちらをとらえてバーバラは言い放つ。

「やめちやいなさい！」

たまらず笑いはこみ上げていた。逸らした顔でついぞ吹き出す。断ったことを気にかけていたらしい。見て取ったバーバラは安心したようだ。緩めた頬でこうも続けてみせていた。

「ごちそうさま。楽しかった、ありがとう」

響きにこそ、社交辞令はうかがえない。

「次に会えたら今度はわたしがおごるから」
なら確かめずにはおれなかった。

「鍵はあるんだろうな」

「大丈夫。それはくりつけてあるの」

また後じさってデカイカバンを抱え上げる。

「これも！」

ついでに叩いて中を示した。

「ありがとう！」

チエブだ。

続くおやすみなさい、が後を引く。

向けられた背中が角を折れるまでを見送っていた。

もしかするとその向こう、すぐのところには家はあるのかもしれない、なら何事もなく辿り着くだろうと考えることにする。

終わった。

思うままに大きく息を吸い込んでいた。軋む胸に背を丸め、それきり返したきびすでホテルまでを歩いて帰る。

翌日、内勤の合間を抜け出し診察へ向かった。

当日は救急搬送口から入ったうえ、それきり入院したのだから手続きが分からず面食う。ようやく待合のベルを持たされ診察室前へ辿り着いていた。

あいだ医者も職員も看護師にも、幾人ともなくすれ違っている。こうして待合の椅子に腰かけ順番を待つあいだも同じだ。果てにようやく分かり、ああ、とひとりごちていた。

目にしてきた看護師の白衣はみな、バーバラのものと違っている。つまり病棟と外来では管轄が違うらしく、骨のひとつも折らなければもう接点はないようだった。知ってあらため「今度、会えたら」の意味を理解しなす。おかげでその姿を探していたことにも気づかされた。振り返った動きは自然だったはずだ。

診察室から名前を呼ばれて立ち上がる。

バーバラが言う通り、中で聞かされた診断結果は問題なし、の一言に尽きていた。来週はすすというコルセットの予定にも変わりはない。だが本人がいらないと思うなら、それまでに外してもらってかまわないとドクターは許可していた。

しよせん肋骨はどの骨にもつながっていない浮いた骨だ。肺の収縮に合わせて常に動く。だからしてギプスも出来ず、コルセットは補助具だった。そして補助具は症状の軽減を促すもので、そもそもなくとも骨は勝手に元通りとつながるらしい。

それもこれも骨がぱっくり真つ二つに折れたせいだろう。粉碎骨折だったならボルトのひとつも埋め込むだろう手術が控えていたはずで、回復にはさらに時間がかかっていたらうと思えてならなかった。

帰り道も言われたとおりだ。散歩がてら遠回りを決め込むことにする。あえて病院の中庭を横切った。見える景色はただ目に映り込み、頭の中で漠然とこれからのことを巡らせ続ける。

「うそ」

言う声が聞こえて我を取り戻していた。なら確かに嘘のようなそれは光景だ。荷物を抱えてバーバラは、白衣でそこに立っていた。

検査の結果はどうだった？ と聞くバーバラは、ドクターの用事でたまたまここを通っただけらしい。言うとおりであったと教えて返せば、わかった御馳走しなきやね、と観念したように腰へ手をあてがってみせる。続けさま「小熊のチェブ」の話し相手がいなくて物足りないの、と笑ってもみせた。

そもそも仕事柄、偶然は信じない方だからしてこの展開を飲み込むのに時間を要したことは否めない。おかげで返事は曖昧だったと記憶している。送れないなら昼間がいい、そう返すのが目いっぱいだった。聞き入れたバーバラは間髪入れず丸一日の休みなら五日後の水曜日なのと明かしている。凝り固まったこちらのスケジュールもまた同日に休みが巡っていたなら、待ち合わせはあの夜、別れた「タイハン」前で午前十時とすぐさま決まっていた。

すれ違ったついでにふさわしい手短さだ。じゃあ、とそこで道を分ける。

それから実感することとなったのは、仕事を片付けるに五日は短すぎるとして、待つには少々、長いことだろう。時間は双方の間を捻じれて流れ、捻じれ切った当日、もういいだろうとコルセットはずすことにする。身軽なのは取り戻した自由のせいかな。待ち合わせの場所

へと向かった。

だがそこに現れたのは、一台のバンにはかならない。目の前でブレーキを踏む様に警戒すれば、ハンドルを握るドライバーこそバーバラだった。袖をまくり上げた麻のシャツでバンを降りると、おかげで素っ頓狂だったろう顔へ向かい、開口一番、こう言い放つてみせる。

「今日は砂漠でバーベキューよ。道具は後ろに積んできてる」

咄然とさせられていた。にもかかわらず、ひとつ断つておかないといけないことがあるんだけど、と申し訳なさげにつけ加えもする。

「なんだ」

「ほかにも友達がついてきているんだけど、かまわないかしら」

などと事後承諾なのだから、そこに追い返すという選択こそ、そもそもない。かまわない、と返していた。聞いてバーバラは喜び勇むと、やおら車内へ身をひるがえす。

「ジョーイ、いいって。出てきてっ!」

なんだ男か、と至極単純に思わされていた。

するとハアハア荒い息は聞こえ、車内からそのジョーイは飛び出してくる。

かなりの巨体だ。

そして確かに「男」らしかった。

しかし雑種だ。たちまちチョコレート色の大型犬は、バーバラの足元へまとわりつく。屈み

込んでバーバラがその頭をなでたなら、嘗め回されてあつという間にもみくちやとなつた。

「勤務の加減で時々預かるの。今日は急で。ともかく同僚の愛犬、ジョーイよ。しつけはしてある。絶対、噛まないわ」

本当か。むしろ現状、頭からかぶりつかれてやしないか。目を疑うが、おかげでバーベキューのわけを知つた氣にもなつていた。これではドツグカフェさえ入りづらい。預かっている以上、放り出すこともできず、こうなつたに違いなかった。

「ほら、座りなさいジョーイ。彼はレフ・アーベンよ。おとなしく挨拶を。ほら、離れて。ジョーイはおりこうさんだつたでしょ？」

言うがジョーイは興奮の真つただ中だ。聞いちゃいない。これでよく預かっているものだと呆れる。

このまま眺めていたところで埒は明きそうになく、ますます腹がすくだけだつた。どうやらこちらから挨拶してやるしかないらしいと前へ屈み込んでやることにする。

その平たい頭を掴んで撫でた。すぐにもジョーイはこちらの手へ興味を示すと、身をひるがえそうとする。だが好きにはさせない。飛びかかれる前に首輪を掴んで押し止めた。力にジョーイはずいぶと驚いた様子だ。あからさまにその動きを鈍らせる。逃さず顔を引き寄せた。吠えそうになったところで間近と見据える。居心地悪そうにするジョーイは目を逸らそうとするが、揺さぶりこちらへ向きなおさせた。

肝心なのはここで決して慌てないことだ。

口にする前に伝わっていることを確かめる。

そこで座れ、と静かに唱えた。

案外、気は合うらしい。

ジョーイはハアハアいいながら、前へすんなり腰を下ろしていった。

乗せて乗り込み、バンで向かったのは砂漠に面したオートキャンプ場だ。

先客のキャンピングカーが赤茶けた大地に並んでいる。ベガスが観光地だからだろう。平日にもかかわらず張られたテントも多く見えた。思い思いに過ごす利用者らはそこでバーベキューを楽しみ、持ち出した椅子の上で寝そべり砂漠を眺め、勝手気ままと過ごしている。混じるべく、バンから早速、道具を運び出した。

仲間とよく来るのか、簡易のテーブルセットを広げ、炭に火を入れるバーバラの手つきはいい。こちらもちちらで足元をうろつくジョーイをかまってやりながら、肉に野菜をグリルへ並べてゆく。

などと好きにするつもりが、バーバラはうるさかった。気づけば互いにああだこうだとバーベキューの講釈を披露し合うハメになる。熱弁が功を奏して腹はすき、はしやぎ通しのジョーイへ水を与え、スチールテーブルを挟んで腰を下ろした。講釈の検証だ。互いの調理を吟味し

合う。

うちにもジョーイは水を飲み干し、向けた顔でおこぼれをねだった。その情けない顔つきといえは、見ている方が萎えてくるほどだ。仕方ない。肉の端くれを分けてやることにする。

「ジョーイ」

呼べば投げた肉へ、ジョーイは変わらず食いついていた。

「そう、ジョーイは私よりレフがいのね」

目にしたバーバラの口ぶりは悔しげだ。

「私のいうことなんかちつとも聞いてくれないんだから。あなた、男の子でしょ。少しはレディをいたわって」

丸のみするジョーイはすぐにも食い終わると、そうだ、とハアハア、また長い舌を出して期待に目を光らせている。甘やかしてはきりが無い。次はやらす、残りはすべて自分が食うことにした。

「なんてことはない。ロシアにいた頃、家で同じくらいの大きさの犬を飼っていた。扱いに慣れているだけだ。同僚は男か？ 女一人じゃ、持て余すだろう」

ははあん、と鼻を鳴らすバーバラは、そうして視線を皿へ落とす。

「ジョーイは彼女のボディガードよ。けど、彼女も私も最初からなめられっぱなし。きつと最初の睨みが足りなかったせいね」

いまさらのように、バウ、とジョーイへ吠え返した。そうして笑ったその口へ、焦げめの目立つ野菜を押し込む。

後片付けは帰る間際でかまわない。せっかく訪れた場所だった。今は風景を堪能することにする。あえて地面へ腰を下ろした。焼けた地面は熱かったが苦にはならず、赤い地平線は肩の位置まで高くなると、空もならって高く、いやむしろ深くなる。そんな景色が錯覚させるのだろう。地の底にいるような気持ちに駆られ、ままに空を見上げていた。

観光用か、赤いセスナがオモチャのように飛んでいる。

追いかけて、果てに消え去ったところで視線を戻した。握るゴムボールは一点を真つ白に光らせた緑色だ。そんなボールを空と大地の境目へ向け投げつける。胸をかばっているせいであまり遠くへ飛ばすことはできなかったが、たちまち追いかけてジョーイは矢のように駆けていった。「あれから、見たんだけど」

声へと振り返る。

バンの中へ身をもぐり込ませていたのは、それを探していたせいらしい。肩までツバの広がる麦わらぼうをかぶったバーバラは、隣へ腰を下ろしていた。

「チエブか？」

問い返すうちにも緑色を口にしたジョーイは駆け戻って、その口からボールを抜き取る。ま

た精一杯、遠くへ投げた。

「ええ。やっぱり感動するんだけど、あの映画の言わんとしていることがまだよく分からない」
「ああ」

うなずき返せばバーバラは、なら聞いて、と話し出す。

「よく分からないのにどうして何もない、って印象だけは残ってこんなに感動してしまうのかってこと。あれは徹頭徹尾つくりもののノンフィクションよね？　けれど物語のつくりは記録映画のようになっていて、だからありがちな起承転結の起伏も薄い感じだわ。そう、もらったDVDを見返して、どうもそのせいで何もない、って感じてるんじゃないかって思ったの。始まってしばらくのところ、ハンターが現れてチェブは母熊とはぐれるじゃない」

呼びかけられて、こちらも頭の中へ「小熊のチェブ」を広げてゆく。

「それこそ物語の始まりの合図よね。だからチェブはこれからどうなっていくのかしらって、ハラハラするわ。けれど実際、何も起きない。チェブはそのまま大きくなって、年老いて死ぬだけ。この辺が記録映画そのもののよね。だから物語は冒頭のハラハラしたところで止まったきり。結局、何も起きず、起きないから終わりもせずに、ドラマチックからほど遠いところでエンドロールが上がつてゆく。眺めてそこで初めて感じ取るのが、がっかりと言うよりどこかはぐらかされたような喪失感で」

指で胸をつき、広げたその後、バーバラは肩をすくめた。

「から騒ぎのあとの侘しさに似てるの。手の届かないところに取り残されて、ぼっかり浮かん
だような。その気持ちにいつまでもとらわれるの。ドラマチックなことは何一つ起きないから
こそむしろ、寂しさが尾を引く。現実ってこんな具合よね、とも」

口を挟む余地はなかった。

「そんな作品なのに退屈しないのは映像のせい。とても綺麗で吸い込まれる。ほんと、そんな
に見せつけておいてただ終わってしまうだけなんて、罪つくりよね」

追いかける話はおおむね同意できるもので、だからしてあいだ先を促し何度もうなずき返す。
「けれどそこではちゃんと何かが起きてるはずだと思うの。表面的なものにこれほど惹きつけ
られるとは思えない。わたしは作品にこめられたメッセージをしっかりと受け取ってる。まだ言
葉にできないだけ。けど必ず、ね」

言い切つて最後、微笑んだ。その鼻先があなたはどう思うか、と尋ねている。なら話題は確
かに誰かれ話せないマニアックなものだと思えていた。ゆえに選ばれたのなら、としばし口を
結んで返す言葉を手繰り寄せる。おかげで手元がおろそかになったなら、ジョーイの物欲しげ
な目と目は合っていた。急かされているようでひとまずボールを投げてやる。追いかけてジョー
イは走り出し、眺めていればそこへ、ベガスビッグビューイングのバックヤードで見た監督は、
自分しか知り得ないスタンリー・ブラックの姿は、静かに立ち上っていった。

「そうだな、あの映画にはもうひとつ、花と言うモチーフもあったろう」

バーバラの話から抜け落ちていた部分を指摘する。

「ああ、そうね。母熊とはぐれた、そこに咲いてた白い花ね。大人になってもチェブは何度もその場所を訪れるし、気になるみたい。ほかの場所で咲いていても興味を示すわ。そんなチェブと花のショットがまた幻想的で記憶に残るのだけど」

「それは母熊への愛着の象徴だ、という解釈が一般的らしいな」

「ええ。そのためのアイコンだって。だから何度も出てくる。確かに、出てくる度に見えてこちらもそう連想してしまう。淡々と過ぎてゆく物語の中に、いつか起きるだろう母熊との再会を、見合うだけの何かを期待してしまう」

「だが、そんな奇跡こそ起きはしない。何もない。気持ちのカラクリは、その辺りにもあるんじゃないか？」

ええ、とうなずく麦わらの広いつばが揺れていた。

「最後まで登場しない母熊は、きつとハンターに仕留められてる。でも本当にそうなのかしら。だったらあの映画はただそれだけの、言うまでもない物語になってしまう。こんなに何を、あたしは気にしているのかしら」

砂漠に立ちあがったスタンリー・ブラックは、いつからかそこでジョーイと戯れていた。興行に疲れた彼にはそれがちようどのバカンスだと思えてならず、おかげでジョーイはおさまりの悪い緑の塊といつまでも跳ねまわり、しばらくの間はこちら戻ってきそうにない。

「ならたといえば、だ。ドラマチックな展開の欠落を感じさせることこそ監督の狙いだった、と
考えてみるのはどうだ？」

投げかけた。

確かに何か起きて当然の物語の中、それはあまりに乱暴な解釈だと思えてならない。だが
当然の構成が破られていようと作品は作品として成立しているならそれは欠損でなく、おそ
らく意図的に仕組まれたものだと考えた方が辻褄が合いそうだった。そして作品は、その企
みを裏付けるかのようにあくまでも現実的な構えを崩していない。

「それ、どういうこと？」

提案にバーバラは振り返っている。

「チェブと母熊の再会はあり得ない。伝えるために俺たちは期待させられた。そう言う見方だ。
そう感じるよう作られているからこそ、鮮烈と無が残る」

などと言つてなるほどそうかと、自分自身、閃いてもいた。

作品を貫くテーマは「喪失」なのではなからうか。

当てはめてみる。

ならそれはチェブを通して擦り込まれる「愛着」にほかならず、あの一件でスタンリー
・ブラックがテロを起こしてまで取り戻そうとした「愛着」が思い起こされてなくなる。

そう、その時すでにスタンリー・ブラックは、自身の映画に対する愛着を失っていた。いやも

つと具体的に示すなら、そこへかける情熱そのものだとするば。

口ごもったせいでバーバラが、どうしたの？ と問い返している。

「感じた通りで間違いない」

伝えて急ぎ口を開いていた。

「何もない。作品のテーマは喪失だ。選んだ監督こそ母熊に匹敵する愛着、大事な何かをなくしていた。その個人的な事情を作品として成立させるべく、誰にでも共感できる普遍的な、だからこそ抽象的なかたちでフィルムへおさめた」

耳へ、ベガスビックビューイングでのあの叫びは蘇る。それは監督が信じ足を踏み入れた世界からのしつぺ返しに違いなく、そこにふいと、バーバラ同様のめり込むほどと得てやまなかった共感の欠片を自身にも感じ取ってみた。

自身もまた最善だと、あの日、入隊を決めたはずだった。

だが結果はそぐわず、痛手を食らう。

振り返ったスタンリー・ブラックが、そこから緩やかに微笑みかけていた。

ポールはそのときジョーイの口へおさまると、くわえたジョーイが身を翻す。

「映画の通りだ」

聞き入るバーバラの目から瞬きは消えていた。

「抱いたドラマチックな期待も、感動の再会も」

見すえて語ればいつからか、この問答が己の出口を指し示し始めていることに気づかされる。

「現実とは期待通りにならず、つじつまが合っているからこそ残酷なほど淡泊だ」

だからして映画の話にかこつけたとしても、言えるなどと思ってもいかなかったそれは言葉だろう。つまりスタンリー・ブラックの情熱も、バーブシカも、で間違いないと思う。

「失えば二度と戻って来ない。終わればそれきりだ。二度と戻ってくることはない」

やがてジョーイは足元へまとわりつき、頭をもたせいかけてくる。甘えさせて撫でつけたなら、こりこりした薄い頭皮の茶色い巻き毛が手に心地よかった。そこへ溶け行くものの感触を今一度、胸の奥でも転がしてみる。

「映画はそれがどういうことを教えているのだと思う。そしてそれを知るからこそ、傷つくままにこうも気にかかった。受けた感銘の、それが正体だと思う」

言い切ったところで確信は揺らがない。

むしろ吐き出したことにほつ、としてみる。

だからして思い起こせば起こすどナンセンスでならない百々はある時、笑い飛ばせとピエロを演じた。それほどまでに、あのとき己は戻らないものにしがみついていた。

と、バーバラが顔を伏せる。大きすぎるむぎわら帽のつばは表情を隠し、今一度、振り上げてなにをや反論しようと、のぞき込むような目を向けた。だが視線はすぐにも背後へ流れる。ただグリルへ向かっていやだ、とこぼしてみせた。

「散らかったまま。私、片付けてくるわ」

立ち上がる様に迷いはない。それきり傍らから離れてゆく。

ついぞ見送ったのは、明らかに中断された会話の意味がわからなかったせいだ。やがて、何かまずいことを言ったらしいと気づかされる。つまり一人にさせてくれと言うのなら、弁解も謝罪も許されてないらしいことを知らされていた。

発言には、そんなつもりこそなかったはずだ。己のことにかまけ過ぎたか。しでかした失敗にまいったな、とただ思う。

ひねり過ぎた体のせいで前へ向きなおるに声はもれた。息を弾ませ、次を待つジョーイとそこで顔を見合わせる。追いかけることができないなら、とその口の中からボールを再び抜き取った。お前もしばらくそっちで遊んでいろ。唱えて地平の彼方へただ手を振り下ろす。

さかいに歯車は回っても軋んで妙な音を立てた。

ままに、まだ真昼のように明るい午後五時。混み合うメインストリートの手前、渡れば泊るホテルの前でバンはブレーキを踏む。

「お疲れ様、到着よ」

声は装い、助手席は始終、ジョーイのものだった。ゆえにあてがわれた後部座席から降り、ジョーイ越しに御馳走になった礼を伝える。

「あと、何か気に障ることを言ったらしい。謝る。知らなかった。悪意はない。忘れてくれ」
聞いてバーバラが投げる笑みには、ため息が混じっていた。隠さず伝えて、そうじゃないのと断ってみせる。

「せっかくだったのに、ごめんなさい。あなたは悪くない。あなたこそ気にしないで。いろいろ、ね。でも今日は本当に楽しかったし、これで私のドジも帳消しよ。ジョーイもたくさん遊んでもらえて大喜びしてるわ」

ジョーイ、さようならして。言う様はまくし立てるがごとくで、明らかにバーバラは別れを急いでいた。なら交わす言葉はもうなく、ジョーイの頭を撫でつける。返す踵でパンを離れた。去りぎわバーバラは手を振っていたようだ。だが確かめ振り返った時にはもう、逸らされた顔こそ見えなくなっていた。やはり早く離れた方がよさそうだと思う。ホテルまでをただ急いだ。

メイヤードから移動したビジネス用の簡素なそこはロビーからして色味が重く、部屋へ戻ればなおのこと総出で出迎え失態をはやし立てる。余計なお世話だ。払ってキーをテーブルへと投げた。

端末の着信を確かめる。資料のファイルが数点、転送されていた。すぐ目を通す気になれなかったなら、その足で浴室へ向かう。埃まみれだ。何より流し去ることが先決だとシャワーを浴びる。

だがさっぱりしたところでたかが気休めは、残るしこりだけをより明確とさせていた。内勤が続いたせいで体がなまったか。覚えた疲れにベッドの端へ腰を下ろす。窓はその傍らにひとつ、あるだけだ。

目を向ける。

通りの向こうにはまだバーバラのバンが停まってついた。

謝っておいたが言葉は足りたろうか。

思い返しかけたところで視線を剥ぐ。それこそ余計なお世話で違いなく、考える時間があるなら資料を頭の中へ叩き込んでおくべきだと目を端末へ向けなおす。開いたファイルは都合よく、ずいぶん分量があるらしい。たちどころに目は並ぶ文字を追うと動き出していた。

冒頭、スタンリー・ブラックが会場で使用しようとした爆発物の分析結果に、入手経路の捜査状況。渡会からは一斉蜂起が阻止されたことを知った七人の様子についてや、そんな彼らの押取物、その分析結果もまた報告されていた。だが組織の全体は想像通り何の形を成すでもなくただのつペリと大きく、互いの接点すら見つからない。おそらく全体を解明するには捜査はまだ半分も進んでいないのだろう。資料はそこでついで、余計事は回り始めた思考の中で記憶の一部と書き添えられるにおさまる。

キャンペーン場から何も口にしていない。落ち着きを取り戻した喉に渇きを覚えて、買い置きしていたインスタントのコーヒーをカップにあけた。湯を注ぎ、たずさえベッド際へ戻る。

窓の外はさすがにもう赤い。眺めながら一口、二口、熱いそれをすすり上げた。

が三口目に、手は止まる。

あろうことか、それはまだ同じ場所に見えていた。

バーバラのバンド。角度もそのままと路肩にある。

咄嗟に時計を見上げていた。壁掛けの針は七時。あれからもう、二時間経っている。なぜだ、と思うのは、言ってしまうばこちらの失言でとつと帰つてこそ、二時間も粘る理由が思い当たらないせいで間違いない。

なにかあつた。

思うしかなかった。

それが車のトラブルなのか。とれとも事件性を帯びたものなのか。もしかすると中に本人が乗っていないだけなのか。ホテルの窓から見下ろすだけでは分かるはずもなく、分からないからこそサイドボードへカツプを戻す。

周辺に、警官の姿はない。

間際まで、バンが動き出さないことを確認していた。

きびすを返し、部屋を飛び出す。ホテルを後にし、早足と通りを渡った。だが近づこうとも、ちようと夕日を反射させたバンのフロントガラスは中が見通せない。目を細めたその時、やおらジョーイが窓から顔を出した。見つけて知らせるように吠えるジョーイの鳴き声はどこか

おかしく、そこでようやくフロントガラスも透けて中を晒す。やはりというべきか、ハンドルへ伏せたバーバラの頭からきし動く様子はなかった。

どうなっている。

吐き捨てる。

燃料にして残る距離を一気に詰めた。

まだ体が思い通りになっていないせいで。たどり着く頃には息が切れ、詰めたり吸ったり、持て余しながらバンの運転席へ回り込む。ざっと車内へ目を通していった。同乗者はいない。荷物も自分が積み込んだままだ。分かったところで窓をノックした。

「おい、バーバラ。おい」

聞こえたらしい。わずかにバーバラの頭が動く。

「おい」

やがてハンドルと腕の隙間から目はのぞいた。知った人間だと気づいたらしい。再び伏せる。と腕へ顔をこすりつける。つまり泣いていたらしい。

「どうした？ 窓を下げる。それともジョーイの方へ回っていいか？」

矢継ぎ早と問いかけたなら、答えようとバーバラが体を持ち上げていった。だがいかんせん動きは緩慢だ。待つておれず助手席へ回り込む。見て取りバーバラも尻を叩いてジョーイを後部座席へ追いやった。見通しのよくなった助手席のドアを、ひと思いに引き開ける。

「レフ、レフっ！ 落ち着いて。私は大丈夫。別に何かあったわけじゃないから」
迎え撃つかのごとくバーバラに浴びせられていた。

「どうした。あれからもう二時間も経ってるぞ。帰ったんじやなかったのか？」
なら涙目でバーバラは、濡れた頬をむくませおどけたように肩をすくめる。

「帰りたいのはやまやまなんだけど、涙が止まらないだけ。帰ろうと思ってもよく前が見えないの。危なくて運転なんて出来ないわ」

言い分に勢いは削がれていた。

「あれから、ずっと、なのか？」

「だって、急に泣きだしたりしたらあなた、困るだろうと思って我慢してたから。おさまったら帰る。もう、おさまるから。だからそんなに恐い顔しないで。落ち着いて。でないと怖くて、また泣けてきそう」

などとバーバラは、かろうじて冗談を言っているつもりらしい。

つまり自分の発言のせいかな。前において唾然としていた。ならよけいに、だった。これ以上、道端で泣かれ続けるなど、かなわない。無理矢理、車を走らせて事故を起こされるのもまただった。

「代われ、送る」

外を指し示しアゴを振る。

だが口を結んだきりのバーバラは、答えようとしない。

「無理だろう」

突きつけたなら、ようやく観念したようだ。うなずき返してバンを降りた。助手席へ回り込むバーバラと入れ違いでハンドルを握る。

「でもどうして？」

なぜわかったのかが知りたいらしい。

「部屋の窓からよく見える」

キーを捻り、後方の他車を確かめた。その肩口からジョーイは顔をのぞかせ、バーバラはすぼめた口で行く先を告げる。

「タイハンで別れた時、私の曲がった角、覚えてる？」

やはりそうか、とひとりごちていた。それだけで目星はつき、アクセルを踏み込む。

「あそこをまっすぐ。ポーチにキリンの立っている家の隣が、そう」

ひとまずバンをホテル前の通りに合流させ、次の角で住宅地へと脇道へ逸れた。

「迷惑かけると思ったから、見られたくなかったのに」

言うが返事はしてやらない。だいたい次にしくじれば死なれそうで冗談ではなかった。だといふのにバーバラは、わけは、とその先を続けたがる。おかげで声は高くなっていた。

「その話は俺じゃなく親しい友人にしろ。そのためにも送る。ひどく傷つけた。それは謝る。」

俺がかかわれるのは、そこまでだ」

だがバーバラは、そんなの無理よ、と聞き入れない。

「同僚に話せば信用をなくす。友達も家族も、分かってくれる人ほどきつと傷つくわ。今の関係を壊したくないの。それにあなたのせいじゃない。違うのよ」

できる限り早く始末をつけたいというのに、こんな時に限って二ブロック進んだところで赤信号だ。バンはアイドリングと小刻みに震え、遊び疲れたせいかな、揺られてジョーイは後部座席で眠りの態勢をとり始めていた。

「レフ、愛着を失くした。それがどういふことを表わした映画だってあなた、チェブのこと言ったわよね。知っているからこそ、そんな映画に傷つけられた。それがこうも気になる感動の理由だって。聞いて私、ひどく動揺したわ」

言うバーバラには蒸し返されているようで、落ち着けない。だが手綱を緩めずバーバラは先を続ける。

「だって、その通りなんだから。言われて、目の前が開けた感じ。そうしたら昨日のことみたいに記憶がよみがえって。なら急に涙もこみ上げて来て」

何を言い出すつもりか。振り返りかけたその時、信号は青へ変わり、早くケリをつけたいからこそ急ぎギアを入れ替えた。ただアクセルを踏みつける。走り出したバンの中、隣りでもちらんあなたは、とバーバラは言っていた。

「映画の話をしただけ。分かつてる。あたしのことを言ってるんじゃないって、頭では分かつてるわ。でも気持ちとは別で。やつぱり、やり直せないんだって。看護師になっても、どんなに病院でがんばっても、映画が教える通り奇跡なんか起きないんだって。なんだかもう逃げ場がなくなつて。受け入れられなかったから、きつとちゃんと見ることもしていなかった。避けていただけが一度に押し寄せてきて」

慌てて左右、頬を拭う仕草が視界の端に映り込む。様子は堪えるというより格闘しているに等しく、やがてバーバラは持ち上げた顔でフロントガラスを見据えてみせた。

「それがレジーの運命だった。これっぽっちがわたしには、まだ飲み込めないのよ」
怒りさえ感じさせるそれは口調だった。

聞けばレジーは、バーバラの三つはなれた兄のことらしい。バーバラが六つだった頃、悪性の腫瘍を患い、闘病を余儀なくされたようだった。治療は半年に及んだが、結果は伴わず、最期は家族が見守る中で息を引き取ったと言う。その時、自分が何ひとつ役に立てなかったことが心の中に強く残っている、とバーバラは話した。レジーが助からなかったのはそのせいではないかそのとき抱いた罪の意識は、今でも拭えずあるらしい。従事する看護師の姿が目には焼きついたのもそのせいで、憧れと目指すところになったのだとも明かして言った。

病室の人気者はつまり、罪がかぶせた仮面だった。

キリンの立つポーチは、角を曲がってすぐにも目についている。子供がいるのだろう。滑り

台のデザインがそうだった。

隣り合うバーバラの家の前でバンを停める。

話はその後もしばらく続き、おかげでしかした失態への罪悪感はいつからか消えていた。ただ代わる思いが胸中を巡り始める。

たとえば看護師になったという罪滅ぼしのような日常にも、代わる命を救うことでやり直そうとする行為にも、身に覚えはあった。共感するには条件が必要で、そろい踏みした誰もがよく似た構図を抱えている。もう手に入りはしないと知るからこそ、忘れ難き影は形はそれぞれにとつて切実なものとまといつく。

果てにスタンリー・ブラックはそれが手を離れて幻のようにぽっかり浮かんでいることを知り、取り戻せないその狭間で狂気に走った。笑い飛ばせと枕を投げられた自分は不条理にそのきつかけを失い、チエブは浮かんでいることを知らぬまま死んで、今、明らかに意識したバーバラは受け入れかねて泣いている。

外から見れば取るに足りない、ありがちですらある構図だろう。だが内から見れば壁は厚く、先はまるで見通せない。閉じ込められた感覚が必要とする誰かさえ遠ざけると、なお事態を深刻と歪めてゆく。

そんなバーバラが最後と決めたように頬の涙を拭っていた。

「だからあなたのせいじゃないの。あたしが一人で騒いでるだけ。けど聞いてくれて助かった。

やっと止まったみたい」

つまり出てこい、と笑わせるのが一番だとして、天性の百々はそのハウツーを残していない。初心者に手探りでやれる自信はなく、とぼつちりだと一蹴する資格こそほとほと持ち合わせていなかった。誰にも話せないというのなら、だ。せめて連絡先だけでも教えておくことにする。「落ち着いたらでいい、電話しろ。気が向かないならあえてとは言わない。あのホテルの七一五号にいる。夜はたいがい部屋だ」

分かったと聞き入れて、バーバラはアゴを引いてうなずいた。

「ありがとう。きつとそうする」

と、背後から妙な音は聞こえてくる。振り返つそこで目にしたのは大口を開けたジョーイの顔だ。犬も寝言を言うらしい。ひんひん鳴いて、何事かをつぶやいている。

まったくこんなときに大將は吞氣が過ぎる。思わずにはおれず、あつけにとられた目はそのとき、同じく後部座席をのぞき込んでいたバーバラと合っていた。つまりジョーイの方が一枚、上手ということらしい。互いはそこで、思わず小さく笑い合う。

ドアが閉まるまでを見届けてから、数日後だ。約束通りバーバラから電話はあった。迷惑をかけたと詫びる口調はそれまでと変わりがなく、おかげで仕事に対する意識が少し変わらざるを得なくなったことを話した。だが今の方がまだ、ともつけ加えて言う。でなかった以前は

病室の誰かが亡くなるたび、同じようにひどく動揺していたらしかった。隠して勤めるのになぜいぶん苦労したのだ、とも愚痴ってみせる。とはいえ、取り返せないものを相手に努力を続けることは難しいはずだと思えてならない。だがバーバラはそれもまた探しながら妥協点を考える、と言ってみせていた。

それがいい、と腰を下ろしたベッドの上で聞く。切り変えの早さに芯の強さもまた感じ取った。

「時々、あなたにこうして話したら助かる。ああ、もちろんこんな話、以外でもよ。気兼ねしないって言ったら、あつかましいわよね。でもそれが本当だから不思議。最初、なんて非常識で子供みたいな人だろうって呆れていたのに。私の方がずいぶん子供みたいだよ」

それは少なからず他人事ではないせいで、おおむね二週間前の話はもう遠い昔だ。

「誰でも撃たれた後は動揺する。そのせいだ」

と、電話口でバーバラは声の調子を跳ね上げていた。

「うそ。言っておくけど、大人しくしていたらお尻じゃなくて腕に打てたのよ、注射」

口ぶりは勝ち誇ったようで、あのとき向けられた笑みが脳裏へ蘇る。だが人がしんどい時に一体なにをしゃがるんだ、思った一部始終こそ譲れはしなかった。

「どっちだろうと変わらない。あれはただの拷問だ」

「何よそれ。れっきとした医療行為ですから。失礼するわ」

「どちらが、めくられて失礼されたのは、こっちの方だ」

言えばバーバラの笑い声は耳に届く。

「友達にね」

残る声で切り出していた。

「このあいだ他愛もないことを言われただけなのに、ものすごく動揺したって話したわ。そうしたら、なにそれ恋愛相談？　って聞き返された」

引き合いに出された言葉は突拍子もなかったが、それはそれは、と聞き流せる。

「気にもとめない相手の話は、そんな風には響かないものだって」

そこでバーバラの笑いは途切れていた。

「面倒でなければ電話じゃなくて、また会って話したいのだけれど」

単純にそれがいとおもうてならない。ああ、とだけ答えて返す。よかった、ともらすバーバラもまたその続きのようで、なら、と携帯電話の番号を教えてよこした。明日の夜、カジノのメインストリート、ストリップで食事はどうかと提案してみせる。残念ながらこちらはオフィスの端末しか持ち合わせておらず、その番号を教えて会話を筒抜けにする気こそないなら、間違ひなく辿りつける時間と場所をバーバラへ告げた。

通話が切れる。

受話器はもうただの受話器だ。

何も喋ることはない。

しばし眺めて元へと戻した。

翌夕、二人で街を歩く。

氣に入った店を見つけ食事を取った。

白衣に合わせてひっ詰めたきりの髪をほどこいたバーバラは、ようやく見慣れた色つきの服に、また違う色を重ねている。そこに己のこれまでを重ね合わせたなら、他人だが他人とは違うその吸引力が肩の力を抜かせていた。おかげで悩み疲れたチエブはバカンスへ出かけ、もう偶然を当てにする必要はなくなり、瞬きをしない監視員のようなキリンの元でまた、と別れる。

あれから三週間だ。

時に忘れて胸は、深く息を吸い込むことがあった。

身軽なのは癒えつつある傷のせいだけでなく、下ろした荷のせいもあるだろうと思えてならない。くわえて思いにもよらぬ出会いが加速をつけていた。

ここでの捜査はあと半月はかたい。スタンリー・ブラックから自供の取れなくなった今、一か月といっても余りそうだった。帰るまでに考えておくことはありそうだと思う。

だがそれは真似たような身軽さだ。翌日、一報は舞い込んでくる。声明文は己の映る写真と共に堂々、ラスベガスの署へ送り付けられていた。

「以降、万が一を考慮して、職員の相互監視を義務付ける。翌日の立ち寄り先等、スケジュールは必ず誰かに伝えておけ。後日、報告書として預かる。伴い、二週間後の撤退を決定。後はベガス署と連邦で引き継ぐ。ただし、この案件は我々が単独で担当したものだ。引き継ぐとは言え根幹までを譲ることはできない。捜査はこの二週間で引き渡せるよう、区切りをつけろ」

仮オフィスは当局のはからいによりメイヤードのスイートルームから、今ではマツキヤラン空港近くのベガス署、その一角に移動している。すでに馴染んで止まないチーフ百合草は今後を並べ立て、面々はうんざりしたような面持ちをその前に並べていた。

「まったく。結局、仕事を増やしやる」

吐いたハートがその勢いのまま、これからのスケジュールをハナへ預けていた。

だがこちらはといえば、さすがに不気味さが先立って仕方ない。ホワイトボードに貼り出された写真から目は逸らせず、咄嗟に彼らが監視していたのはこの瞬間だけだったのか、過るままに考えを巡らせた。

そもそも声明文の内容からその信憑性は疑われているが、この瞬間を写真におさめることが出来た以上スタンリー・ブラックの行動を把握していた何某がからんでいる可能性は否定できない。つまりあの時、スタンリー・ブラックがなそうとしていたことを知る相手であればこそ、一概にハツタリだと言つてのけるには危険があった。だからして相応の報復が用意されている

として、仕掛ける場所を探し、内勤で持て余した分、出歩いただけをつけ回されていたのなると振り返る。ただだけないことにそこへ顔を出す誰かといえは常にバーバラだけだった。他にこの地に親しい誰かは、いない。

まさかな、と内心、呟く。

だが相手がターゲットに据えているのは、本気で警戒すれば手出しが困難な対テロ組織だ。効率的に成果を上げるのであれば、避けて脆弱な所へ攻撃を加えるソフトターゲットという言葉はちらつく。現に考慮して各家族への対応も話が済まされたところだった。

「それからレフ」

百合草に呼び止められ、睨みつけていた一点から振り返る。

「期限付きになったせいで人手が足りない。今日から勤務時間はそのまま、外回りに戻ってもらうつもりだが異存は？」

目がいくつかの意味で大丈夫だな、と問いかけていた。体調も、撃たれた直後の動揺も、今、見た写真のインパクトも許容範囲なら、ない、と答えて返す。

「なら後で曽我から指示を受ける」

しかしながらあてがわれるのは雑用らしい。文句は出かけたが、あぶれたストラヴィンスキーに見定められ己のスケジュールを切り出されていた。仕方なく頭へ、聞いたままを詰め込む。曽我から聞いたそれをストラヴィンスキーへ預けた。最後、帰ってから出歩く予定はないかと

聞かれ、ない、と答える。

バーバラは一人暮らしだとも言っていた。ともかくもう会わない方がいいだろうと結論づける。巻き添えに、などと考えるのは気が早すぎて笑い草だとしても、少なくともバーバラにとって関与らない方がいい人物に成り下がったことだけは確かだった。

そう、バカンスへ出たら必ず家へは帰るものだ。どれほど居心地がよかろうと、勘違いはほどほどにすべきである。そして「勘違い」は誰にでもあることで、とりたて騒ぎ立てる必要などなかった。次いでそもそも女性と二人きりで過ごしたのは何年前か、とさかのぼり、まさかバーブシカとではないな、と一人「笑い」に紛らせる。

その後、フロントからバーバラより電話が入ったという知らせは二度、あった。一度はいなかったことにしてくれと断り、一度だけ出ることにする。夜勤後の休みだから一日半、空いているけれどそちらはどうかと問われ、仕事を立て込んできたせいで無理だと断った。またそのうち、と受話器を置く。

携帯電話の番号を明かしているせいだ。バーバラに疑うような素振りはない。おそらく何かあればそのうち電話がかかって来るだろう、くらいに思っているに違いなかった。

ままに時は過ぎ、そういうばあの人はどうなったのだろう、と我に返る姿を思い描く。何しろ互いはただ話し、幾らか食事をしただけだった。病室では世話になったが、その礼は自ら用

意したわけではないものの、わずかな花と共に退院時、述べている。そもそもこの事情すべてが話せない。黙って消えるべきだと思えてならなかった。

それをさかいにフロントへは、バーバラからの電話をつながないよう断りを入れた。昼間は余計ごとを考えるヒマなくこき使われ、夜、同じ時間が来れば横になり目を閉じる。その忙しさと規則正しさに一週間は瞬く間と飛び去り、さらに一週間、フロントからバーバラから一度、電話があつたことを知らされた。もう次はないだろうと、撤退を始めた仮オフィスの後始末にいそしむ。

慌ただしさは急ぎ訪れた時にも増して言うべきか。おかげで時にぽつかりと訪れる空白は際立つと、やおら遠く離れてやって来たはずのこの地を妙な親しみでもつてして離れ難く惜しませた。

何しろ色々あり過ぎた。

誰にとつても感慨深いはずだと思えてならない。

終わりと始まりが交錯する。

冷ややかで熱っぽい、乾いた風が層を成して吹き抜ける。

さらされた時間はその両端で刻む間合いを変えてゆき、引き伸ばされて出来た隙間の奇妙な日々。

そういえばあの人は、と思ひ出すのはひと月後くらいが妥当か。それとも案外、そうも振り

返ることなく消え去るものなのか。

入院患者こそ絶えることはないだろう。

妥協点が見つかるといいが。

いやせめて、話せる誰かが見つかるといいが。

ただ漠然と願ってみる。

「おい、今の角だぞ！」

がなり立てるハートの声に、慌ててフロントガラスの向こうへ焦点を合わせていた。

ロス経由で米国を発つ今日、マツキヤラン空港発は十八時。ホテルは出勤時にチェックアウトを済ませており、大きな荷物もまた日本行きのおフィス最終便と共に午前中、空港へ送り出してしまっている。だからして借りていたベガス署の一角はもうがらんどくに等しく、詰める先がなくなった各自もまた時間までの自由行動を言い渡されていた。

それでも気になる件があるらしい。ハートはベガスビッグビューイングへ向かえ、と人をこゝうして運転手代わりに使っている。そんな自分は無理をいって預かってもらった最後の手荷物を、ホテルのフロントへ取りに行く途中だった。

「ぼーっとしやがって。入院と内勤で錆びついたか。ミスター、スタンドプレー」

確かに、通い慣れたベガスビッグビューイングへ出る裏道を曲がり損ねている。Uターンできる場所が見当たらない。この辺りをもう一周するしかなさそうだった。

「うるさい。ミスをするのが人間だろう」

ふん、と鼻息を吹き出すハートは相変わらぬのタンクトップ姿だ。隣で組んだ太い腕を見せつけていた。

「ソガが言っていたぞ」

などと切り出された話は、初めて耳にするものである。

「頼んだはずが用件のひとつ、ふたつ、必ず抜けているとな。そんな具合で写真に取られて、お前だけ吹き飛ばされるな。いいか、そういうスタンドプレーこそ、いらん類だ」

ついぞ知らされず、そのわけを感じ取ってむしろ舌打ちは自分へもれた。

「その時は五分あればわけがないあんたを、信用している」

悔し紛れと精一杯を吐けば、ハートはそいつはどうだかな、と続けてみせる。

「どうやら人間はミスをするものらしいからな。手が滑って吹き飛ばすかもしれん。いやその方がお前も目が覚めるか」

今度こそ間違えないだろうな、と窓の景色を警戒した。

あの世で覚めてどうする。頭の中で呟き返せばハートは言う。

「らしくないぞ、どうした」

つまりパパに話せ、とでもいうつもりか。

「どうもしない。あんたも撃たれてみればわかる」

だがマイペースなおやじは、そら次は間違えるな俺たちはハツカネズミじゃないぞ、と突き出したアゴで角を指し示す。確かにやり過ぎたポイントは近づいており、腹立ちまぎれだ、ウインカーを跳ね上げた。見届けハートは安心したらしい。

「バカを言うな。家族を泣かせるのは俺のポリシーに反する。危ない橋を渡るのは、お前と仕事をしているだけで十分だ。いいか、その家族のためにもとばかりを受けんよう、話くらいなら聞いてやる。嫌なら帰って、とつとカウンセラーにでもかかれ」

そうまで言われて誰が素直に従うのか不思議でならない。

「ああ、あんただけには死んでも相談はしない、安心しろ。だがカウンセラーの必要もない」
言っていた。

口ぶりは過ぎたか、ハートが怪訝な顔を向けている。

まわすハンドドルで払いのけた。

「女か？」

とたん問われる。驚きより先に恐怖を感じて、単純に心臓は跳ね上がっていた。医者のお墨付きとはいえ殺す気かと思ひ、ついで何を根拠に言っているのかと恐る恐るハートへ視線を流す。ならハートは言っていた。

「まったく、ばあさんのことはどうにもならない。いい加減、決着をつけろ。ごつくせにハリボテだ。女々しくせして白い面でしれつ、とすましてやがる。気に食わん。一緒に仕事を

している自分の忍耐に、ほとほと感心する」

女は女でも違ったらしい。

同業者はこれだからやつかいだ。その勘をただ嫌った。

だから相談しないんだ、とだけ返して、ようやくたどり着いたベガスビッグビューイング前でブレーキを踏む。事故るな、と指を突きつけるハートとはそこで別れた。

確かにカマをほりそうで、気分に入れ替えは必要に思える。だからして荷物を拾った後、どこで昼を食うかを考えた。その頃にはもう署には誰も残っていないはずだ。車を返すついでに引き継ぎの取りこぼしとして、バーバラの自宅付近警戒を頼んでおく段取りを頭の中でつける。ままに車を置いた地下駐車場から、ホテルのロビーへ足を踏み入れた。

とたん足は床に貼りつき動かなくなる。

いや、教えていたのだからつじつまは合っていた。

フロントマンとバーバラは、そこで何やら話し込んでいる。しかも話題に上がっているだろう人物が戻ってきたせいだ。フロントマンがバーバラから視線を逸らした。なぞりバーバラもまた、振り返る。目と目は合い、我ながら呆れる結末を聞かされていた。

電話をかければ、今朝、チェックアウトしたと教えられた。

バーバラがホテルを訪れたわけは、あまりに単純だ。

「今日っ？」

挙句、声を裏返される。

「今日って、今日、帰るのに黙っていたの？ もう昼だわ。携帯電話の留守録にでも入れておいてくれればよかったのに。休みだからフロントに伝言を頼もうと思ってよかった。で、どこまで？」

避けた人目は一般市民もこみだ。地下の駐車場に停めた車の助手席でバーバラはたたみかける。言わざるを得ない。口を開いた。

「日本だ」

返答は、丸かったバーバラの目をなお丸くさせる。

「日本っ。そんなに遠いの？ なのに一言もないって。わたしたちまた話せるわよね？」

質問は矢継ぎ早で、どれも間違っていないかった。だからしてその全てに答えることにする。

「本来オフィスは日本にある。こっちでの仕事には昨日、区切りがついた。ついで俺は今、あまり人とかかわりたくない。だからこちらから連絡を取るつもりもなかった。本当はこうしてある間も、あまり落ち着けていない。つまり日本の連絡先を教えるつもりも、ない」

バーバラの瞬きは止まっている。言っている意味がよく分からないのだけど。呟くようにたずねていた。

「つまり、付きまとわれると困る、そういうこと？」

おおむねあつていたので、口は挟まない。挟まないことでそうだ、と理解したバーバラは落着け、と自分に言い聞かせている様子だった。

「ええ、あなたが警察関係者だつていうのは、保険の請求先を知っているから疑つてない。けれど何か私へ言えないようなことがある。そのせいで、かわりたくなかった。どうせならなかったことにしたい。そのためにも黙つて帰る」

だからして話は破綻しておらず、まったく的を外れというわけでもない範疇におさまっている。訂正のしようがなく、黙つて返せばバーバラは眉をひそめてこうつけ足しました。

「そのうち忘れるだろう、とでも？」

目が、恨めしげとこちらを見ている。凶星だただけでなく、覚えたうしろめたさに鼻からため息のような唸り声はもれていた。

「その方がよっぽど、いやらしいわ。なによ、私たちはただの友達でしょ？ やましいことなんてなにもないじゃない」

すくめた肩で投げつけられる。

「知られてどこが都合、悪いの？」

問われ誰に、と勘繰り、気づかされて慌てた。どうやらで二股をかけようとしていた男だ、と結論づけられたらしい。それは違う、と遮った。

「話せないのは仕事上だ。人と関わりたくない理由もそこにある。かわりたくない、話せない

いなら会う理由がない。黙って帰った方がいいと考えたのは、そのせいだ。余計な問題を起こしたくない」

言う顔さえバーバラは吟味している。その眼は鋭く、やがて口にした質問はそのせいにか、ここでも的を射ていた。

「……仕事の問題って、また防弾ジョッキを二枚、着こむつもりでいるの？ あなた」

察しのよさに助けられ、だからして意味が伝わればと、握るハンドルの手触りを確かめつつ返す。

「それは必要があればだ。ただ重いうえに暑い。ひとには勧められない」

あいた間は、ぎこちなかった。

「だから会わないなんて。そんなの、連絡先を教えてもらうだけ、でも？」

口調は、一言一言を確かめるようだ。

だが折れて教えるに相手は、政府機関のサーバーをハッキングした過去歴を持っており、その気になれば数多ある一般回線だろうとなんだろうと、連絡を取り続けていけば拾い上げてみせるだろう輩だった。加えて広域をインターネットでカバーし、湧いて出るかのごとく徒党を組んで行動する組織ときている。そんな彼らには距離がなく、万が一を考えれば考えるほど

「それくらいならかまわないだろう」が言えなかった。

そして言えないことはすなわち、連絡先を教えることで増すだろう親密さが互いの間でもう、

必然であることを知らしめ、顕在化すればそちらの方こそ厄介で、厄介だというわけこそ明かせず言葉は詰まる。

様子を眺めるうちにもバーバラは、それなりの深刻さを察した様子だ。吊り上げていた肩を落としていった。

「……嘘みたいな話、しないでよ」

前へ向きなおりただこぼす。

「嘘はついていない」

せめて写真に写っていないければ、もう少し大きく構えられたはずだと思う。だが、でないからこそ、こうも落ち着くことができないでいた。

「関わるな。それが最善だ。だからしてこの後も、家まで送るつもりはない」

ほかに言いようがなく、ならバーバラはあのね、と静かに口を開いてゆく。座席の上で向きなおった。

「失えば、二度と戻っては来ないの」

投げ込まれた言葉にフロントガラスから振り返る。

「仕事の邪魔はしないわ」

聞かされた言葉に眉を詰める。

「だからもう少し今の関係が続けたい。わたしはそう、思っている。あなたはそういう最善を、

考えはしなかった？」

問にかけてバーバラは、どう、と首をかしげた。

その瞳に戸惑うのは、それこそ考え、勘違いだと割り切り、「笑い」に紛らせ切り捨てた部分だからだ。だというのに拾い上げてその人は、再び前へ差し出しこれはバカンスではなくこれから先も続く日常なのだと教える。その口ぶりこそ「笑い」に紛らせられるようなものになく、むしろ考えた、言いそうになっていた。だが起きかねない万が一に、言えやしないと踏み止まる。

なら囲われたそこで言葉は巡った。

巡るままに迷えばそこもまた、森となった。

そんな茂みの奥から声はする。

花を巡るチエブが「また我を通すのか」と語りかけていた。

そんなことは分かっている。あのとき失敗したのは悪いことをしていると自覚しつつも、我を通したせいにある。そして今も確かにうしろめたく、だがそれとこれとは違うと睨む。

試すな。

力んでチエブを追い払った。

向けて今度は遠くから、在りし日の口癖は聞こえてくる。

試されているときほど素直になりなさい。

バーブシカは繰り返し、だとして素直になればなるほど妄想はこうしてこびりつくトラウマと、巡ってそれを許そうとはしない。

挙句、思い当たった現実に我へ返っていた。

どうしてだ？

己へ問いかける。

これでもそれで飯を食っているはずなのに、である。

なぜ脅かされて対処しようとしなののか。

それは至極真つ当な疑問にほかならず、よもや今さらそんな自信などない、などと言えるはずもなかった。元より逃がすつもりはないはずで、手出しさせないつもりだった。

過れば揺らぎ続ける胸の内へ、言葉はひとつ杭を打つ。

バーバラへは返事をしていない。

ただ奥歯を噛み、前へ向きなおる。

キーをひねった。

エンジンには震えだし、その咆哮に己が意を重ねる。ここで起きた全ては日常として日本へ持ち帰る。でなければ脅されるがまま手放すなどと、それはまた彼らに愛着を奪われたも同然の結果だと、アクセルを踏み込んだ。

同じ失敗は、二度と繰り返さない。

そのためにもつける算段へ思考を巡らせる。

急に走り出した車の行き先にも、険しいまま固まったこの顔にも、バーバラは何がどうしたのかと不安げな顔つきだ。目に余って次に会うまでの連絡先を教えておく、とだけ伝えてやる。ただし、と条件を挙げ連ねていった。

連絡先は、携帯電話のみに限定。そしてその電話で気まぐれに連絡を取ることを禁じた。通話は仕事前と仕事上がりの二回のみとし、つまり自分からは掛けず、話さないことを、しかしながら聞いているから好きなことを話すよう指示する。ただ身辺で気になることがあったなら、どれほど些細なことだろうと伝えることを約束させた。

期間は、ひと月。最終日にいつもとおりと返答がなければ、以後、ひと月づつの更新もまた取り決める。

不可解かつ、不条理な条件だろうに、バーバラはその理由を問うてこない。ただ変わらぬ不安げな面持ちで聞いているだけだった。様子はもつと他の何かを気にしているようで、それが何なのか、まだかいもく分らない。

ともかく、自分はプライバシーのそれをもっておらず、バーバラの携帯電話は国際電話がかけられないタイプのものであった。近頃の携帯電話の契約はデザインさえ選り好みしなければ一、二時間あればすむスピーディーさである。

話し終わればちょうど店は目につき、停めた車から降りた。避けていたことが嘘のように

バーバラを連れて歩き、回線を契約する。その片方をバーバラに与え、少し遅れた昼飯を取った。コーヒーを傍らに互いの番号を交換し、ルールを復唱させ、携帯電話の動作もまた確認する。

バーバラの覚えは早い。別れた後の心配もなさそうに思っていた。だが裏腹と、しきりにこちらへかかることを確かめたがる。そのたびに呼び出し音はジャケットの胸ポケットで鳴り、動作しているとバーバラへ言つて聞かせた。

と、それは店を出て、家へ送り届ける車の中だ。本当につながる？ と確かめる口調に初めて、携帯電話ではなく自分への不安が隠れていることに気づかされる。おかげで過つたのは黙らせるために与えたそれは小道具である、というシナリオだろう。与えられた妙な条件もさることながら、本当は電話口に出る気などないのだと、ままだ日本へ帰ればそれきりになるはずだとたかをくくっている、そう罵る声さえ聞こえてくるような口調だった。

だがそれこそつながる、と言つて返すしか手はない。それでも再三、問うバーバラに苛立ちを覚える。顔つきを推し量つたか、そのうちバーバラも確かめなくなつていった。

沈黙の中、やがて行く先にキリンは見え始める。

傍らを通り抜け、ポーチの前でサイドブレーキを引き上げた。

降ろしたバーバラを玄関口まで送り届ける。なら鍵をさして開けたドアの前、振り返つたバーバラはまたあの言葉を繰り返していた。

「本当に、つながるのよね？」

不安さえうつりそうで、つい言葉に力が入る。

「さつきから何度も言っている。つながる。信用しろ」

とたんバーバラは目を、見たこともない形へ吊り上げていった。

「だってあなたは何も言わずに帰ろうとしたのよ。信用しろって、どこを？ そのうえ帰るのは日本？ わけはおおよそ嘘みたいな話ばかりっ。はいそうですか？ うなずけない。日本っていうのも諦めさせるための嘘。電話もすぐつながらなくなる。あなたの都合を邪魔するつもりはないわ。けど黙って帰るところを見つけたからって、こんな玩具。みえすいた嘘で誤魔化そうだなんて子供だまし。あたしをバカにしてるっ！ それが悔しいの。いい？ 続けたかったから言い淀んだことも追求しなかった。なのに、なのにこんなやり方っ。信じろっていう方が、無理なのよっ！」

吐き出した口元が小刻みに震えていた。押さえてバーバラは、すぐにつけ足す。

「ごめんなさい。大きな声。喚いてばかりで嫌な女」

聞き流すしかない。

「なんてことはない。俺のせいだ」

「こんなだもの、つきまとわれると困るわよね」

「そうじゃない」

やおらバーバラはうなずき返した。

「わかった」

様子は観念したに等しく冷めきっている。

「信用してる。仕事、気をつけてね。電話は明日から」

言うが、無理矢理、吐いた言葉に頬は歪んでいた。見つめるほどに、どこからどうなつてこうもねじれていったのか、もどかしさが胃の腑を掴む。だからといって二人しかいない容疑者の中から犯人を捜し出すことさえ出来ぬ己に、もつれた最初へ戻る器用さこそ要求できはしなかった。できないことにも、足りない時間にも、信じろとしか言えないもどかしさがただ苛立ちを募らせる。その苛立ちもいつからか、果たして誰へ向けるべきものだったのか、分からなくなろうとしていた。

それでもバーバラは身を縮め、じゃあまた、とドアを引き寄せる。

果てに「失った」らしいものはそこにまざまざ貼りつけられて、目の当たりにしてようやく信じさせるにはもう言葉だけでは足りないことを思い知らされていた。

クソ、と胸の内で吐きつける。

やろうとしていることとやっていることが、これでは真逆だ。

だが決定的になろうとも、見られていなければかまわないと思う。足を出し、わずか残ったドアの隙間へかませた。閉め切られる寸前、中へ身を滑り込ませる。

様子に驚きバーバラが振り返っていた。その頭を引き寄せる。仰ぎ見た唇は飲んだ息に開き、有無を言わずただ塞いだ。疑う余地などどこにもない。教えるべく、あるだけを吹き込む。縮んでいた手に掴み返され、なお強く言い含めた。

離れて黙し、伸び上がったバーバラといばむようにまた触れ合う。
用件は、つまりそれだけだ。

カルチャーセンターのロビーでは、そうしていともたやすく踵を返そうとしていたはずだった。だが全ては様変わりすると果ては見えなくなる。

声だけが、まだ触れたままの髪の中から聞こえていた。

そもそも嵐の中では前さえ見えず、シエルターなんて気の利いたものこそありはしない。ゆえに通り過ぎるまで、互いは互いに掴まりその場をしのぐ。たとえばそれは離さない、と約束させるための意地悪い嵐だったとして時に人生には、そんな風が吹きつけるらしい。

きつとここが砂漠だからだ。

そんな風に冷やかさはもうない。

熱にあおられ、揺れて蜃気楼が地平を波立たせていた。
その空と大地の狭間へ、またあのボールを投げつける。
追いかけてジョーイは走っていった。

だが戻ってこない。

波立つそこへチヨコレート色を滲ませると、ただ溶けるように消えてゆく。

すねているような、ふてくされているような声がきつと、と前置きしていた。軽い女だと思ってる。言うものだから、ならこっちは付け入る悪い男だ、と返して拳を振り上げられていた。思い出したか、しかしながらすでに古傷になりつつあるそこへは落ちてこず、悪い冗談、とアゴ先をなぶってその手は引き戻されてゆく。

おかげでプレッシャーとリスクを引き込んだことになろうとも、それで目が覚めればハートの嫌味も聞かされずにすむはずだった。

「本当は、何者？」

今さらそれはない。バーバラがたずねる。

「期待されても何も出ない」

肩をすくめて返せば、傍らから穴が開くほどじいっと見つめられた。真剣な眼差し奥から、やがてこうバーバラは投げよこす。

「……あなたも何か、なくした？」

おそらく隠し通せはしらないと思う。すでに晒しているようなものだから、馴染む温度が離れがたい。だとして、理解してもらえる誰かに会うまで大事と閉じ込め持ち運んできたそれを話

すのは、今でこそないだろう。すべてがすんだその後いずれ、と思う。

見破ったようにバーバラが、その身をせり上げていた。どこを探しても自分にはない柔らかさで口づける。それはまた今度、会った時に。交わす約束で怪しげな男を赦し、おそらくすでに慰めた。

瞬間、鳴り響いたのはスタッカートの効いたトランペットの音色だ。鼓膜を打つ高音が頭上から放たれる。不躰な乱入に互いは跳ね上がり、その滑稽さに間近と見つめ合った目を丸くした。すぐにもほほ笑みを残してバーバラは腹ばいになる。伸ばした腕でそれを掴み引き寄せた。「やだもう。夜勤に合わせたままだった」

目覚まし代わりに使っているらしい。ラジオだ。かかる髪を払いのけ、裏側にあるらしいスイッチを手の中で探る。だがなかなか見つからないのは寝起きと同じで、うちにもラジオは歌い出していた。ひと節目から軽快にタイトルを歌うその曲は、大戦時ヒットした、往年のジャズナンバーだ。知っていたなら、ついでタイトルを口にしていた。

「聞く?」

ラジオと格闘していたバーバラが振り返る。

目を伏せてただ返した。

見届けたバーバラがラジオを手放す。これから始まるとおきの名作を鑑賞するかのよう
に、落ち着きどころを探って傍らへ身を沿わせた。なら互いはそれぞれ左右についた耳のよう

になる。聞き慣れたメロディーを体中で吸い込んだ。

時が失せ、望むままと表の喧騒もまた遠のいてゆく。

そうして歌声にに漂えば漂うほどだ。誰がリクエストしたのかと疑わずにおれなくなっていた。何しろおせっかいなほどとタイミングは合っている。ああその通りだ。思えば腹の底から笑いもまたこみ上げていた。

「なに、どうしたの？」

揺れ出した肩にバーバラが、アゴを持ち上げのぞき込んでいる。

「いや、なんでもない」

「うそ、初めて見た。ばか笑いよ」

自分でもまさか、と疑えないから事実だ。

「いい歌だからだ」

返したところで、それが笑いと結びつかないこともまた承知している。おかげでよいバーバラは怪訝な面持ちだ。いや、それは誤解だ。思えばこそ、ついぞ教えてメロディーを口ずさんでいた。それでもバーバラに的を射た様子はなく、じれったさにリズムを取って歌声を大きくする。押されてバーバラがついに吹き出し、どうしようもなさげに笑い始めた。

「レフ、あなたちよつとおかしいわよ」

「ああ、その通りだ。おかしくなった」

それもこれも君のせいだ。

言う代わりに狙い定める。無防備なその体を、くすぐってやった。こらやめなさい、と丸まり上げる笑い声は教わらずとも自分が出させたもので、そこへDJの語りは重なる。

「さてラスベガスは、午後五時。眠らないエンターテイメントの街はこれからが本番。スタジオからグッドラックを祈ってるわ。もちろんリクエストも、ノンストップで受け付け中。受け付けは……」

瞬間、凍りついていた。

奈落に落ちるとはこのことか。

目は覚めて跳ね起きる。外していた時計をサイドテーブルから引っ掴んだ。早いか文字盤へ目を落とす。当然ながら針はそこでもたがわず五時を指していた。

「まアずいッ」

「今度は何？」

バーバラが驚くのも無理はない。だが振り向いている時間さえ惜しかった。ベッドを蹴り出し、ただ告げる。

「六時の便でマツキヤランから発つッ」

やだ、と声を上げるバーバラは、空港までの距離を知っていた。次いでそっちは外よ、と投げる。冗談じゃない。足を廊下で反転させた。

間に合わなければ、などと考える余地はなかった。むしろ遅れてしまえばどう言い訳をすればいいのか思いつかず、飛び込んだ浴室で叩きつけるようにシャワーを浴びる。タオルを拝借して部屋へ戻れば、バーバラはそこで服を広げて待っていた。

まったくもって介護だ。手伝われて一枚、二枚、足を通す。切れのいい口調にうながされて靴下をはき、タオルで髪をかきまぜられる。その肩へ着て、とシャツは引っかけられていた。

袖を通す。

ピンクのオックスフォードシャツは、新品同様だ。

カフスをとめるついでに腕時計の文字盤を確認する。病院で百々を拾ったあと向かえば、スキャンジナビアイーグルスの取り調べにはちようと間に合う時間を指していた。いや、と思いなおす。何しろ相手は百々だ。こちらの思うとおりに運ぶとは限らない。

昨日「ブライトシート」でひと悶着つけているさなか、かかってきたバーバラの電話は、こちらへ来ると言うものだった。直接、話したいことがある。口ぶりは深刻で、今日こそ遅れるわけにはゆかないと気を引き締める。

なら思い出される、遅れるわけにゆかなかったあの日はさんざんで、玄関口でバーバラにこんなもの置いていかないと、と叫ばれ銃さえ取りに戻っていた。

ともかく空港近くだったことが幸いして、車は署に返せている。だがバーバラの自宅周辺の

警戒についてを言い含める時間は残っていなかった。代わりに開いたばかりの回線がある。諦めるにぎりぎりの、それが条件だった。

しかしながらそうまでして辿り着いたハズの空港で、結局、乗った便の離陸を三分、遅らせている。理由を問われぬハズはなかった。逃げ場のない機内で、真綿で首を絞められるのかのごとく弁解すれば、断念したはずの周辺警戒は百合草の口から署へ伝えられている。

心底、いただけないのはそれから先のことだろう。噂はその瞬間よりバーブシカのことからバーバラのことへ変わった様子だ。証拠に、唯一、見舞にきていたストラヴィンスキーがどの看護師さんか、と聞いてくる始末だ。図太さに腹立ち紛れ、一番の美人だと吐き返してやれば、あなるほどとニンマリ笑ってみせるのだから、今後一切、何があろうと、是が非でも、徹底的に、この件については話さないことを心に決めた。

ちなみにバービーなどと勝手に愛称をつけたのも、ストラヴィンスキーだ。いつしかうつて口になっているわけだが、決して本人を呼ぶ時には使っていない。

ワゴンは表に停めたままだった。

いつもながらのタッチアンドゴーで自宅を後にする。

首尾よく取り調べが終われば、多少の時間は都合できるはずだった。などとハンドルを握りながら考える一方で、ついに報復は現実のものと動き出したのだ。会わないに越したことはないとも己へ言い聞かせる。

だがどこかで会う算段をつけていた。

だからして着替えに立ち寄り、あの日の歌も鼻先からもれだす。

君の待つ家へ帰れたらなあ

空　高くそよぐ風の元

温もり分かť君の元へ

それだけで満たされるのに

本来は、大戦下の兵士の気持ちを歌った歌だという。

だが今なら流行ったわけがよく分かつた。

すべてを片付け、家へ帰る。

あの日、過つたままを歌と共に繰り返す。

たとえば凍てつく果てない夜も

たとえば燃える真夏の太陽も

愛する君がいて、そんな家へ帰れたら
それ以上はもう

この世のどこにもありはしないと思うんだ

乾いた風はここにも吹いている。

待っていてくれることを願っていた。

ひどく馴染むその場所へと、

帰りたく願うまま風をまかせバンを走らせる。